仙台藩における蘭学の発足と大槻玄沢・平泉、堀田正敦

王　　一　兵

要　旨

仙台藩では江戸時代後期に、藩士子弟に組織的な教育が行われ、藩政改革を推進することとなる。仙台藩は学頭大槻平泉が総裁した学制改革によって、早く蘭学を取り入れ、世界に目を向けた教育を行ったと評価できる。本論文は、大槻平泉に着目し、藩校養賢堂の振興と蘭学の発達する過程を辿りながら、蘭学の大家である大槻玄沢が、それまで平泉に与えて影響を明らかにする。そして、彼らの背後にいたが、いままで取り上げられることがなかった、仙台伊達家より幕府の若年寄まで登った堀田正敦に焦点を当て、彼が幕府の有力者として、仙台藩の学者をいかに動かそうとしていたかを検討する。

【キーワード：仙台藩 / 蘭学 / 堀田正敦 / 改革】

はじめに

文化・文政期（1804-1829）のころから、藩校に洋学を導入する藩があらわれ、幕末までには38の藩が洋学教育を実施していた。洋学に早くから強い関心を示していたのは、薩摩・長州・佐賀・土佐・宇和島など洋学の発信地、長崎の近くに位置していた外様の藩である。遠方でも積極的な藩に仙台藩・佐倉藩などがあった[1]。

仙台藩は、文政４年（1821）に藩校養賢堂に蘭学方の一課が設け、翌５年には先に養賢堂より独立した医学館に蘭方科を設置した。全国でも、藩校から独立した医学館に蘭方医学を置いたのは仙台藩を嚆矢とする。蘭方科では、蘭学の大家である大槻玄沢をはじめ、林子平など蘭学に対して積極的で、好意的な学者が数多く活躍していたことは看過できない。

当時学頭を務めた大槻平泉は、昌平黌出身の儒者とはいえ、朱子学一点張りではなかった。医学館を独立させ、算学を学科に加えたことなど、実用の学に対する開明的な識見には、平泉の進歩的な性格が窺える。この伝統は平泉の後も大槻習斎、大槻磐渓まで継がれている。習斎の時代の洋学教授であった熱海貞爾の指導により、西洋式製塩法が導入され、藩北部の気仙沼に塩田が設けられた。磐渓は西洋事情に通じており、当時の先覚者として開国論を唱え、国家的レベルで大きな影響を残した。

このように、仙台藩の藩校養賢堂の行く末に大きな影響力を与えた大槻平泉であるが、これまでの先行研究では、平泉が学制改革を主導したことのみに焦点が当てられるばかりであり、蘭学科を含む学制改革に、どのような要素が影響を与えたのか、その歴史的な経緯以外の点には言及されることはなかった。

そこで本稿では、平泉がどのような学問的傾向を有していたのかをはじめとして、養賢堂改革が

どのような人物のいかなる背後関係を有して行われたのかを明らかにしたい。本論が重視するのは、大槻玄沢と幕府の若年寄堀田正敦である。

一、大槻平泉について

大槻平泉[2]は、奥州の大名葛西氏の庶流で、父兄ともに江戸の聖堂で学んだことがある。大槻家は仙台藩磐井郡で代々大肝煎を勤める家柄で、同族からは蘭学者・蘭方医として名を馳せた大槻玄沢を輩出した家系である。

平泉（清準）は８歳から地元の神職である笹谷修理に句読を学び、18歳の寛政２年（1790）から仙台藩士志村東蔵に師事した。翌３年４月、平泉は志村について江戸へ上り、聖堂学寮に入り、「柴野古賀尾藤三博士に昌平黌に従い苦学」[3]したと述べている通り、昌平坂学問所で「寛政の三博士」から指導を受け、学問に一心に励んでいた。

昌平黌にいた頃は、ちょうど林家塾の改革が進行していた時期で、学寮が幕臣子弟の教育機関に改編されることになり、諸藩から寄留していた学生が退学を命ぜられた。しかし平泉ら三人の学生だけが残留を許され、それまで従事してきた素読指南・校合の他、種々の調べ物や書物の編纂などの仕事にも従事した。平泉は大学頭から歴史上の度量衡の変遷を調べることを命ぜられ、40日ほどで、『諸代尺度考』という書物を編纂して提出している。また『大学章句纂釈』『大学諸説辨誤』の両書は最終的に古賀精里の著書になったが、実際には平泉がすべての編集を行ったという。彼はこのように高度な知識を身につけ、昌平黌で着々と地位を固めていった。林大学頭や三博士とのつながりは、のちの平泉の優位さを保つ一因となったとも考えられる。

享和元年（1801）、平泉は60日間の暇を請い得て、東海道を旅し、20州を遊学した。「猶も心に飽らず思ひければ」と、まだ満足できず、享和３年（1803）、31歳の時、再び諸国へ遊歴に出て長崎まで行き、その際日本の62州の内に、58州を遊歴した。彼の著書『経世体要』は遊歴の見聞を語るものである。平泉は、諸国遊歴を通じて、鋭い目で時勢を把握し、広い視野に立って物事を考えるようになった。

文化２年（1805）、平泉は聖堂に帰り、翌３年（1806）、仙台藩に禄せられて、儒臣となった。文化６年（1809）、「学頭御用」となった平泉は藩命によって、学制改革構想を18ヶ条にまとめた。彼の改革構想の主なものとして、学舎の整備、学校財政基盤の確立、学制の権限を学頭に集中すること、人材育成と人材選抜などがあげられる。平泉は学頭として42年間にわたり、その間藩主周宗・斉宗・斉義・斉邦・慶邦の５世に侍講していた。長男の習斎が、家職を継いで第５代養賢堂学頭となる。

二、長崎見聞と大槻玄沢

いうまでもなく近世の長崎は、「鎖国」下に唯一開かれた国際貿易港として、来航する唐船・オランダ船によって、海外情報がいち早く伝えられる場所であった。本論文では「長崎に壱ヶ年余り滞留」する時期に注目し、当時の見聞を踏まえながら、平泉に与えた影響を検討していきたい。

少年時代から旅を好む平泉は、自ら「煙霞観察使者」[4]という彼自身にふさわしい名号をつけた。旅行家の平泉は、明確な目標を考えずに、ただ「広く師友を求め、知見を啓」[5]くという漠然とした衝動に駆けられ旅立った。しかしその旅は、玄沢からの依頼によって、蘭学と出会う契機となったのである。

大槻の名を持つ同族でもあり、蘭学者として名高な大槻玄沢は、『魚王譯史』[6]「西洋鯨品譯説附言」の中に、「享和癸亥同族民治準字子縄豚児茂禎相携テ、各国ヲ遊歴スルノ企アリ、コヽニ於テ老大嘱スルニ、便通肥前平戸ニ赴キ漁鯨ヲ一見シ、其見ル所ヲ録メ余ニ贈レト」と記述しており、これによると、玄沢は長男玄幹（茂禎）[7]と親戚の大槻平泉二人が、享和３年（1803）に諸国遊歴の計画を立てていることを知り、平戸へ行き「漁鯨」（捕鯨）を見学し、見たことを記録するよう頼んだ。玄沢と鯨の出会いは、天明元年（1781）蘭学修行の一環として、ヨンストン[8]の「水族譜」の中の一角魚説を訳したことにある。

玄沢は「山縣氏ニ書信ヲ通メ二子ノ事ヲ託セリ」と、若い二人の保護を山縣氏に託している。山縣氏は平戸藩の藩士山縣二之助[9]であり、捕鯨について詳しい知識をもつ人物である。寛政12年に江戸で玄沢が治療したことがある。「文化改元ノ春、長崎ニアリテ彼地ニ起ケリト平戸ヲ過キ再ヒ海ヲ渉テ生月島ニ至り、益富カ家ヲ主トシ、滞在数日後ニ其捕鯨ノ盛事ヲ見タリ、山縣氏ノ同族親戚等相為ニ歓待シ、其漁事ノ詳ヲ告ケ」とあるように、山縣氏一族は滞在数日間の平泉・玄幹を歓待し、彼らに多くの情報を伝えた。

平泉の紀行文『鯨海游志』[10]によると、彼と玄幹は文化元年（1804）１月11日の早朝に長崎を発ち、平戸藩生月島[11]に捕鯨見物に行った。平泉は『紀游文稿』で「平戸有白石士業。如生月島観捕鯨魚壮観也。唐津五島壱岐対馬皆捕鯨魚。而壱岐為盛」と述べている。

平泉は「長崎に壱ヶ年余り滞留仕、中野忠次郎ト申蘭学者二阿蘭陀天文稽古仕」[12]と、長崎に滞在する間は蘭学者の中野忠次郎に接触し、蘭学を学んだ。同行した玄幹も中野の門に入り、蘭学を昇進させた。平泉は中野のことについて、「精於西洋学。前為和蘭通辞。今退養痾。実隠君子也。余方所講西洋象緯翻訳之書。皆其所授也。」[13]と述べている。

中野柳圃[14]は世間との交わりを絶って、専らオランダの書籍を耽読し、著作や訳業に励んだ。その数は生涯に30種余りになった。これを大別すると天文暦学、オランダ語学、世界地理学に三分される。『鎖国論』の訳者で、著作『暦象新書』などが知られている。

江戸に帰った平泉は、玄沢に頼まれていた捕鯨見物の報告書を提出している。『魚王譯史』には、

> 民治ハ長崎ニ皈リ其紀聞ヲ主トシ別ニ所見アリテ一書ヲ撰述シ本邦及異邦ノ諸説ニ及ントス、茂禎ハ彼地ニ在テ偶々和蘭捕鯨図説ノ書ヲ一譯司ニ得テ此ヲ読ンテ、海外ノ異聞ヲ弘益セント欲シ、中野柳圃ニ就テ譯ヲ受ケ一書ヲ述フ、東皈ノ後共ニ余ニ示シ、且其平戸海ノ実験ノ漁話ヲ以テス、コレ余カ素志ヲ償フニ足テ、其喜ヒ知ルヘシ故ニ亦民治ニ勧メテ其集成ノ功ヲ竣ンヿヲ慫慂ス、

平泉の捕鯨の記録に、玄沢には大いに喜び、平泉にその集成を勧めたのである。その後、平泉は生月島見聞記録を内容のもとにし、国内外の捕鯨に関する諸書を参考しながら、文化５年（1808）に『鯨史稿』を全６巻にまとめた。鯨の種類や効用、各地の捕鯨地、用具・船舶などについて詳しく記した著作である。巻之一から巻之三までは鯨に関する学術的記載であり、巻之四から巻之六までは、捕鯨業の実際を紹介したものである。

文化元年（1804）９月６日、ロシア全権大使のレザノフ[15] が長崎に来航した。「魯西亜来貢紀事」[16]によると、望遠鏡が異国船を捕らえたとの連絡がはいり、レザノフが乗ったロシア船は、その日のうちに伊王島の沖に碇をおろした。「長崎の港。唐山和蘭皆来貿易。各置其館。魯西亜来聘。在去年九月。余搭船往観之」[17]と記してあるように、この時長崎にいた平泉は、佐賀藩の船に便乗して、ナジェジダ号の近くまで行き、見物をした。ロシアは日本の北辺に隣接しているので、後世大いに日本を脅かすものになると、平泉は断言している。さらに『経世体要』の「事変」の項に、「海防は当時至極の要務なり」と、日ごろからの海防の重要性を痛感した。平泉は鯨の研究をどのように生かしたのかについて、『経世体要』の「兵制」の論述を見よう。

> 当時西海・南海に鯨組あり。土州には藩中には鯨部一隊ありと聞けり。先鯨部は其時節になれば。鯨を捕まへ鯨を食料になり。また油をとりて用るものなれば。極意は水戦を習の微意なるべし。其上食料を得るは古屯田の遺意に似たり共云んか。さればこれは兵を鯨部に寓するとも云ふべし。

つまり、鯨は食料として食べられるし、その油も効用がある。そして、海戦の練習対象ともなる。「兵を鯨部に寓する」と主張し、これは捕鯨の人は常に海上で作業するので、外寇を防ぐには最もよい兵備であるといっている。平泉は長崎での実体験からこのような説を唱えるようになったのである。

平泉が鯨に関心を持つようになったきっかけは玄沢の依頼であり、また玄沢が極力平泉らに便宜を与え、この長崎遊学を順調に実現させたのである。平泉はオランダの天文学をまなび、オランダ船に上り見学し、実際に捕鯨を見物した。更にロシア船の来航による警備問題を念頭に置き、対外的危機の深まりという時勢意識に基づいて、世界へ目を向けるようになったのである。

だた、このような長崎遊学における蘭学学習も、平泉独りの力で全てが出来たわけではない。オランダ船への乗船をはじめ、そこには幕府若年寄堀田正敦の力が大きく関わっていたのである。そこで次節では、仙台藩における堀田正敦の影響力を確認しておきたい。

三、学制改革と堀田正敦

堀田正敦は、仙台藩６代藩主伊達宗村の８男として仙台で生まれる。天明６年（1786）堅田藩主堀田正富の養子となる。寛政２年（1790）から天保３年（1832）まで、若年寄を務め、幕府の文教政策の中心的役割を担っていた。『寛政重修諸家譜』千五百余冊のような膨大な編纂作業を総裁し

た人物である。寛政８年（1796）、仙台藩７代藩主重村、８代藩主斉村が相次いで亡くなり、残されたのは生まれたばかりの周宗である。この危機を乗り越えるために、周宗の叔父にあたる堀田正敦は後見人となった。

大槻平泉は文化３年（1806）仙台藩の藩儒にあげられ、「祭酒より頻に留められたれど、固辞して仙台に遷」[18]った、２年後の冬から仙台藩の藩学で講経を始めている。「初準拝儒職之命也。思致身報国家。常期於心曰。異日我得為国家大興学者。吾志願足焉」と、藩儒になって間もない平泉は、学問を振興するよう志したのである。当時の藩校養賢堂は、「学堂狭隘。不能容生徒」[19]という不振の状態に陥っていた。

> 時に文化５年（1808）36歳なりき、明年藩より先生並に桜田周輔其他の諸儒に学制拡張の意見を徹す、大夫中村日向[20]、先生の意見の大にして備はれる採らんとすれど、群小之を排して議、軽く行はれず[21]

平泉は聖堂出身とはいえ、藩内での地位が低く、第一責任者として大改革を行うのに多大な困難がある。平泉の改革案は藩儒の桜田欽斎や、志村篤志を代表とする批判を受けていた。その内容は鵜飼幸子の論文[22]に詳しい。

> 日向乃ち先生に一策を授け、其意見を持して江戸に出で、先づ幕府の参政堀田摂津守正敦君に批准を請ひ、次に林大学頭に請はしむ、二人認可す、正敦君は仙台中将宗村朝臣の第八子にて現藩主の大叔父なるに、祭酒の賛成まで得たれば先生の説今は喙を容るべきなし。[23]

そこで、昌平黌の大学頭だった林述斎と、幕府文政担当の若年寄であった堀田正敦[24]に改革案を示し、その理解と支援を得てから藩に建白するようと、仙台藩奉行の中村義景が平泉に提案を出した。中村義景は幼少な藩主政千代（周宗）の補佐にあたり藩政を主導していた。頽廃いちじるしかった士風の刷新を図るため、藩校養賢堂の学頭に大槻平泉を起用して学制の抜本的改革を行わせた人物である。平泉はこの一策を授け、学制改革意見を18ヶ条にまとめて江戸に上り、林述斎と堀田正敦とのふたりに認可をもとめた。

学制改革の成否は幕府当局と大いに関っていると察せられる。もし林述斎と、堀田正敦の理解と支援を得ることができれば、誰も反論しないであろう。平泉はこの問い合わせについて、以下のように記録している。

> 當此之時。紹山公（９代周宗）幼沖在江戸邸。已故厳崎邑主中村義景攝國政。時堅田侯（筆者注：堀田正敦）為大府參政。於公有諸父之親。故國事一咨稟於侯。厳崎主慮準舉於寒微未足取信於人。故令準以七年四月適江戸議学政於是條東学政十八事。先取正於祭酒林子。然後稟旨堅田侯。六月還上之政府。林子即準嘗所師事大府祭酒述齋先生也。其所議衆不得測。倚以為重。學制得

大成以否。於此焉為兆。[25]

このように、堀田正敦は仙台藩の学制改革に際して、大槻平泉の改正案を認め、有力な保護者としてその実行を見守っていた。実は、正敦は従前より仙台藩の有識な学者を支援してきた。平泉自筆の「儒学家業伝統来由書上」にはこのようなことが記載されている。

中野忠次郎と申蘭学者ニ阿蘭陀流天文稽古仕、唐館阿蘭陀館一覧仕、唐人阿蘭陀人江も出会仕、阿蘭陀船へも上船一覧仕候、唐館阿蘭陀館の義ハ堀田摂津守様林大学頭殿長崎御奉行肥田豊後守殿江御添書被成下、阿蘭陀船之義ハ権頭御役々之外ハ上船罷成不申候所、攝津守様被仰入候を以右何レも表立ち一覧仕り候

即ち上述のように平泉らは長崎で唐館や阿蘭陀館を見学し、唐人や阿蘭陀人と面会し、阿蘭陀船に上船さえできたというのだが、その面会は堀田正敦と林大学頭からの「長崎奉行肥田豊後守殿」十郎兵衛頼常[26]への添書があって可能になった。阿蘭陀船への上船も、正敦の「仰入」のおかげであった。

何故この様な便宜を図ったのであろうか。そもそも堀田正敦は蘭学に深い理解を示し、蘭学・国学・漢学を問わず、有能な学者を厚く保護していた。医師の栗本丹洲や、蘭学者の桂川甫賢や、本草学者の小野蘭山など学者や文人と広く交際し、彼らの学問を最大限に発揮させると同時に、その保護者にもなった。伊達家より出た人で、仙台に縁故が深く、同藩から輩出した学者の後ろ盾として、仙台藩の学問・教育を背後で守りつづけた。従来の研究にも指摘されてきたが、大槻玄沢も堀田正敦と密接な関係を持っていた。文化２年（1805）の『官途要録』に「明廿日四時、揃ニ而魯西亜国へ漂流之者共罷出候ニ付、御自分出勤仕候様被仰付候」とあるように、大槻玄沢は藩命により、漂流民らの伝聞をもとに『環海異聞』を編纂した。『環海異聞』の後、玄沢は『北辺探事』、『北辺探事補遺』を編集し、仙台藩に提出している。これらは、ロシアに関する情報を諸書から纏めたものである。この時期、幕府も仙台藩もロシアに関する情報を必要としていた。これをきっかけに、玄沢は正敦の厚遇を得て、本格な医学研究から離れ、海外事情に目を向け、情報の収集や外交文書の翻訳など、対外関係と関わるようになったと指摘されている[27]。玄沢の蘭学界における地位の裏に、堀田正敦の勢力が影響していると考えられるのである。

正敦は、玄沢をはじめ、その他の学者をも縦横に駆使し手学問振興を図っている。彼の補佐中に仙台藩でできたものに、『環海異聞』のほか、儒学者田辺希文、希元父子の『伊達世臣家譜』がある。また、正敦は『観文禽譜』を編纂する際には、仙台藩の学者桜田欽斎、河野杏庵が加わって、彼らの協力により『観文禽譜』が訂正、完成されたことは欽斎の生涯を記録した「鼓缶子年譜」[28]より明白になる。正敦は明らかに仙台藩の学問の興隆に関与していた。

このように、幕府中枢にいた堀田正敦は、仙台藩における学問振興に大きく寄与していたことが窺える。このような正敦や更には大槻玄沢の存在が、平泉による養賢堂の学制改革の後押しにも

なったのであるが、それについては節を改めて見てゆく。

四、医学校の独立

本節では、改めて医学校の独立経緯を明らかにし、平泉による学制改革と正敦や玄沢の影響について見てゆきたい。

仙台藩の藩士教育は、元文元年（1736）の早くより始まり、正敦の実兄、７代藩主伊達重村は宝暦10年（1760）に学問所で医学教育も開始させている。重村もまた、正敦同様、文化行政に関心が深い藩主であった。大槻玄沢は天明６年（1786）、江戸詰めの仙台藩医に任ぜられた。文化７年（1810）５月、玄沢は藩に向けて医師の専門教育の必要性を指摘し、既設の医学校に対する改革提言「御医師育才呈案」を上申したとされる。

> 医書講釈者是迄養賢堂にて致来候事に御座候処、此度本堂御改正二相成候に付は本堂之脇地面江別段に医学之館舎御造営、薬園も被相附公儀医学館之如く追々ハ御仕法御改め被遊可宜、併講釈等は先以是迄之姿にて被指置可然哉と奉存候　文化七年庚午五月第二番草案

この提案は、医師育成に着目し、庶民に医薬を施すと共に、生徒に治術を実習させる機関にもなるという。玄沢の指示を受け、医学館を養賢堂から分離させようと、平泉は文化10年４月に学制改正案の一項として上申した。

> 是迄学校におゐて仕候医書講釈を相止於別所医学館を建施薬所之意を兼薬園を付置医書講釈仕可然哉奉存候。

これに対し、林述斎は「至当の事に候」と認可を与えている。学制改革において、平泉は学科の増設を行って学問の充実に尽力した。その中で蘭学方を設置し、蘭書の翻訳と講義をも実施した。文政４年のころ、桜田欽斎の建言と推測される「養賢堂之儀に付献言書」（『伊達氏資料』第３輯巻之２所載）に、学校は稽古するところであり、蘭学を学科に加え、オランダ語を学ばせることには批判的であった。欽斎も正敦の厚遇を受けた優れた学者であった。また長崎に遊学し唐館を訪れ、華音を学んでいた。しかし、和蘭への理解は浅く、平泉と蘭学に対する姿勢が違っていた。師志村東蔵は門人三人についてこのような言葉を語った。「吾門他日に期すべきもの応に民治（平泉）を以て第一に推すべし。周輔（欽斎）は学余りて経世の才却て民治に及ばず、篤治は徳行あれども遠く二子の才学に及ばず」[29]と。本来も経世の才学があった平泉は、玄沢の影響のもとに、蘭学への関心と理解を深め、学問振興の偉業を為す一代学頭としての素質を備えていたのである。

文化８年（1811）、藩医の渡辺道可はこの改革案に加えて、蘭医学科の設置、学生実習の施薬局の開設、医学館運営費調達法などを含む仙台藩医学館設立の建議を再度藩庁に建議した。藩はその建議を認め、漸く医学館の設立を認可したのである。

文化14年（1817）に医学校を分離独立させ、より効率的な医師の育成を行った。全国でも、他の教育機関から独立した医学館に蘭方医学を置いたのは、仙台藩が最初である。文政４年（1821）には藩校養賢堂に蘭学方の一科が設けられ、翌５年には先に養賢堂より独立した医学館に蘭方科が設置され、玄沢の高弟佐々木中沢などが講師となった。

最後に、医学館の構内に創設された図書館について触れる。天保２年（1831）一関藩の商人青柳文蔵寄付の蔵書２万冊と千両をもとに、医学館に公開の文庫として「青柳文庫」を開設した。これはわが国初の公共図書館である。全国旧藩の蘭書調査で判明したところで、冊数の多いのは幕府の書庫（葵文庫）が第一で、次に越前藩、仙台藩が第三である[30]。蘭書の蔵書数からも仙台藩の蘭学の優位性が窺える。

仙台藩は当初から、オランダのみならず、ロシアにも多大な関心を寄せていた。寛政期から化政期にかけて、ロシア南下政策などの影響で、日露関係は緊張感高まりつつあった。それとともに、ロシアを中心とした対外問題に積極的に取り込んだ人々で、仙台藩医工藤平助、同じく仙台藩の経世家林子平がいた。ロシア人はエトロフ、カラフト方面に入り込んだため、幕府は文化４年（1807）、仙台藩をはじめとして会津、南部、津軽の諸藩に蝦夷地警備を命じた。その総督が堀田正敦である。エトロフ襲撃事件の処理のために、堀田正敦は蝦夷地に赴いた。出発する前に、当時最新のロシア情報であった玄沢の『環海異聞』を仙台藩から借り出した。『環海異聞』は、実は仙台藩を後見していた正敦が制作を命じたものであった。玄沢の子玄幹等も視察に同行している。

また、長崎でレザノフの来航を身近で経験した平泉は、学頭就任の後、門人の小野寺丹元を江戸に遣し、オランダ・ロシアの両語を学ばせた。丹元は嘉永２年（1849）養賢堂の蘭学和解方引切に任命され、蘭学方に露学和解方を設置するなど十年間にわたって仙台藩の洋学の発展に尽力した。そのほか、平泉は藩命で、世界地理学で重要な「俄羅斯版万国輿地図」の翻訳にあたり、山村才助、小野寺丹元などの協力により、３年間かけてようやく完成した。

以上のように、東北地方における対外防備という政治的、外交的な問題に際して、堀田正敦との関係は引き続き大きなものであり、正敦の庇護を受けながら、平泉を中心として養賢堂は蘭学教育や蘭学研究の一大拠点となっていったのである。

関係年表

1803大槻平泉・玄幹、遊学して長崎に至り、中野柳圃に蘭学をまなぶ
1804露西亜の使レザノフ長崎に来航し、相互貿易を求める
1805露西亜に漂流したる三人を召し、彼国の風土民俗を聞く
1807露西亜人蝦夷地エトロフ島を寇す
堀田正敦は蝦夷地に赴き、松平定信に仙台補佐を依頼する
1808大槻平泉、江戸より仙台に帰り、挙げられて儒員に列し、養賢堂に講経する
1809大槻平泉、藩主の命により養賢堂の学制を計画する
1810大槻平泉、養賢堂の学制十八ヶ条を携え、江戸に大学頭林述斎及び堀田正敦を訪ねて批正を請

う
大槻玄沢、「御医師育才呈案」を上書して医学館の設置を強調する
1811大槻平泉、学頭に任ぜられる
1815仙台百騎町（東二丁目）に医学館を設け、なかに施薬所を設ける
渡辺道可、医学館総督に任ぜられる
1819医学館附属御薬園を設け、薬用植物を栽培し、施薬所における方剤調合の原料を供給する
1821大槻平泉、門人小野寺丹元を江戸に遣し、和蘭・露西亜の両語を学ばせる
藩命により「俄羅斯版万国輿地図」を、江戸の山村才助、小野寺丹元などの協力により翻訳する
1822医学館内に蘭科方を創設する

（『重訂　宮城県郷土史年表』を参照）

おわりに

以上のように本稿では、仙台藩の蘭学において、蘭学者及び広義の蘭学にかかわる一連の学者、即ち直接蘭学を指導しなかったが、蘭学の価値を深く理解し、その発達を支援し、そして蘭学による世界観に立つ人々として、蘭学の大家である大槻玄沢をはじめ、政治的な影響力を持つ堀田正敦や、経世家林子平、とくに学頭大槻平泉などの業績も非常に大きかったことを明らかにしてきた。大槻平泉は聖堂での学問経験や、長崎の遊歴経験があり、そして、蘭学界の巨匠である大槻玄沢と親族である故、早く蘭学の重要性に気づいた。仙台藩の学頭となり、幕府若年寄である堀田正敦の支持を得て、蘭学方を藩校に開設した。関心事は実用的知識や先進技術である大槻平泉は、彼は実務家であり教育行政家であった。後任にする長男の習斎は、英語やロシア語の講座を設けたほか、鋳砲、西洋砲術を導入、さらに造船、洋式軍艦の建造も行った。

仙台藩出身で後見職を務めた正敦は、同時に幕府の要人として、天文方蛮書和解御用を取り仕切る立場にあった。寛政の改暦や、江戸期最大の西洋百科事典『厚生新編』の翻訳など、宏大な事業を行った文教界の有力者である。仙台藩の学者の残した文書には、彼の名が多々現れる。

ただ、彼は仙台藩の学者及び先覚者とどのようにかかわり、仙台藩にどれほど影響を及ぼしたのかを究明することは、仙台藩ないし江戸時代全体の学問に重要な意味を持つ、大きな課題であり、本稿でも十分に取り上げることは出来なかった。未解決な問題、たとえば仙台藩の暦学と正敦の主導する寛政改暦、仙台藩の飢饉と正敦の重要視する救荒本草などについて、また後日の研究に期待したい。

注

1　荒川紘「洋学教育の歴史的意義」、人文論集54（２）、2004年

2　大槻平泉（1773-1850）、江戸後期の儒学者である。通称は民冶、名は清準、字は子縄、平泉は号である。大槻平泉は、磐井郡中里村の大肝煎の家に生まれ、博覧強記の志村東嶼に学び、次いで江戸に出て大学頭林術斎の門人となり、昌平坂学問所で朱子学を学ぶ。諸国遊歴の後、文化３年（1806）に仙台藩に儒官として召し抱えられ、同６年に９代藩主政千代（周宗）は平泉を学頭御用に、翌年正式に学頭に命じる。

3　「大槻平泉伝」（鈴木省三編、1892年、『仙台史伝』、静雲堂）
4　大槻平泉『紀游文稿』第６巻（宮城県図書館所蔵）。「煙霞」はけむりとかすみのことで、「煙霞の痼疾」は深く山水を愛して執着し、旅を好む習癖という意味である。
5　大槻平泉『経世体要』（鈴木省三編、1923年、『仙台叢書』第２巻、仙台叢書刊行会）
6　大槻玄沢『魚王訳史』、文化５年（1808）、長崎県平戸市松浦史料博物館所蔵
7　大槻玄幹（1785-1838）江戸後期の医者。蘭学者。大槻玄沢の長男。名は茂。字子節。号は磐里。陸奥一関（岩手県）出身。長崎で志筑忠雄にオランダ語をまなぶ。仙台藩医をつとめるかたわら、オランダ語文法書「蘭学凡」をあらわす。文政７年（1824）幕府天文方の蛮書和解御用の翻訳官となった。
8　ヨンストン（John Jonston、1775-1861）ポーランド出身の医学者・博物学者。江戸時代、ヨンストンの動植物図譜の蘭訳本が日本に舶来した（1660）。本書は日本に持ち渡られた最初の蘭書である。幕府の医官野呂元丈は、通詞の通訳で、この本の内容をもとに寛保１年（1741）に『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』を撰訳した。
9　山県二之助、４代又左衛門（正真）は蝦夷地開発をめざす江戸幕府の命で，寛政12年（1800）択捉島捕鯨の可能性を調査した。
10　長崎から生月島までの往復の出来事を記したもの。（鈴木省三編、『仙台叢書』第９巻、仙台叢書刊行会、1925年）。
11　長崎県北部、平戸島の北方に浮かぶ島。江戸時代には益富組を中心とした沿岸捕鯨が活発に行われ、平戸藩の財政を支えていた。
12　大槻平泉「大槻清準家譜書出」（仙台市史編纂委員会、1996年、『仙台市史 近世Ⅰ 藩政』、仙台市発行）
13　注（４）前掲『紀遊文稿』
14　中野柳圃（1760-1806）江戸時代中後期の蘭学者。肥前長崎出身。代々阿蘭陀通詞をしていた志筑家の養子になったので、別名で志筑忠雄ともいう。『鎖国論』の訳者。著作に『暦象新書』など。
15　レザノフ（Nikokai Petrovitch Rezanov、1764-1807）ロシアの遣日使節。文化元年（1804）長崎に来航。ラクスマンにつづき幕府の通商拒否にあい半年後退去。途中，部下に日本の北辺を攻撃させた。この事件は江戸時代になって日本が外国からの軍事的な攻撃をさらされた最初の事件で、幕府諸藩や知識人たちに大きな衝撃を与えた。
16　「魯西亜来貢紀事」は大槻玄沢自筆の覚書である。レザノフ来日時、長崎から届く情報を玄沢が書き写したものである（早稲田大学付属図書館所蔵）。
17　注（４）前掲『紀遊文稿』
18　大槻文彦「大槻平泉先生略伝」（平重道、1936年、『仙台叢書』18、宝文堂）
19　大槻平泉『講堂小誌』（鈴木省三編、1923年、『仙台叢書』第３巻、仙台叢書刊行会）
20　中村日向（1756-1833）、陸奥国仙台藩重臣。正室は第６代藩主伊達宗村の７女認姫、堀田正敦の同母姉にあたる。文化９年（1812）８月、奉行職を退き、隠居した。文政２年（1819）、この年に第11代藩主となった伊達斉義の諱を避けて名義景を景貞に改める。
21　大槻平泉「養賢堂学制改正意見書」（平、前掲書）
22　鵜飼幸子、1981年、「養賢堂の学制改革について―桜田欽斎、志村篤志の反論を中心に―」、仙台市博物館調査報告書第２号
23　注（21）前掲「養賢堂学制改正意見書」
24　堀田正敦（1755-1832）仙台藩６代藩主伊達宗村の８男、７代藩主伊達重村の弟として仙台で生まれる。天明６（1786）年堅田藩主堀田正富の養子となる。通称は藤八郎。号は水月。寛政２年（1790）から天保３年（1832）まで、若年寄を務め、幕府の文教政策の中心的役割を担っていた。「寛政重修諸家譜」編修の総裁をつとめ，鳥類図鑑「観文禽譜」も編集した。

25　注（19）前掲『講堂小誌』

26　十郎兵衛頼常は寛政11年（1799）から文化３年（1806）まで長崎奉行を務めた。

27　洋学史研究会編、1991年、『大槻玄沢の研究』、思文閣、26ページ

28　「鼓缶子年譜」（鈴木省三編、1924年、『仙台叢書』第７巻、仙台叢書刊行会）天保元年（1830）の項に、「往歳在江都日、堀田公令質訂正其所著禽譜。質因薦河野杏庵以自代。杏庵在江都二年而帰。猶以公命持藁来就質訂正。至是公請我藩命質助杏庵。五月命従其請」とある。

29　「結社誓辞由来」（平、前掲書）

30　池田哲郎、1952年、「仙台藩の蘭学」、『歴史』第４号

参考文献

阿曽沼要、2010、『仙台の医学史』、丸善出版、47-48ページ

荒川紘、2004、「洋学教育の歴史的意義」、人文論集54（２）

池田哲郎、1952、「仙台藩の蘭学」、歴史４

石川謙、1977、『日本学校史の研究』、日本図書センター

板沢武雄、1933、『蘭学の発達』（岩波講座日本歴史）、岩波書店、71-72ページ

鵜飼幸子、1981年、「養賢堂の学制改革について―桜田欽斎、志村篤志の反論を中心に―」、仙台市博物館調査報告書第２号

大槻玄沢『魚王訳史』「西洋鯨品訳説附言」（早稲田附属図書館所蔵）

大槻玄沢『官途要録』（杉本つとむ編、1994、『大槻玄沢集Ⅱ』、早稲田大学出版部）

大槻玄沢「御医師育才案」（大槻茂雄編、1991、『磐水存響』、思文閣）

大槻平泉『経世体要』（鈴木省三編、1923年、『仙台叢書』第２巻、仙台叢書刊行会）

大槻平泉『講堂小誌』「講堂本末」（鈴木省三編、1923年、『仙台叢書』第３巻、仙台叢書刊行会）

大槻平泉「儒学家業伝統来由書上」（早稲田附属図書館所蔵）

菊池勝之助、1972、『重訂宮城県郷土史料』、宝文堂

佐藤誠実、1973、『日本教育史』第２巻（東洋文庫）、平凡社、44-45ページ

鈴木省三、1892、『仙台史伝』、静雲堂

仙台市史編纂委員会、1996、『仙台市史 近世Ⅰ 藩政』、仙台叢書刊行会

宮城縣史編纂委員会編、1987、『宮城県史』第11・12巻、宮城県史刊行会

森弘子、2011、「文化５年、大槻清準『鯨史稿』成立の政治的背景」、西南学院大学国際文化論集 25（２）、53-82ページ

森弘子・宮崎克則、2012、「『鯨史稿』と『鯨漁業話』の関係」、九州大学総合研究博物館研究報告第10号、79-98ページ

洋学史研究会編、1991、『大槻玄沢の研究』、思文閣